

卷五

太田和泉守これを綴る

元龜三年壬申

むしやの心路御普請の事

三月五日、信長公、江北表へ御馬を出だされ、赤坂に御陣取り。次日、横山に至りて御着陣。

三月七日、御敵城大谷と山本山の間五十町には過ぐるべからず。其の間へ推し入り、野陣を懸けさせられ、与語・木本まで放火なり。江北の諸侍、連々申す様、与語・木本へ手遣ひの砌は、節所を越し来たるの間、是非共一戦に及ぶべきの由申しつる。日比の口言むなく、足軽えさへ然々とも仕らず候て、無異儀なく、九日に横山まで御人数打ち納れられ、三月十日常葉寺に御泊。

三月十一日、志賀郡へ御出陣。和爾に御陣を居させられ、木戸・田中推し詰め、御取り仰せつけらる。明智十兵衛・中川八郎右衛門・丹羽五郎左衛門、両三人前出にをかせられ、

三月十二日、信長公直ちに御上洛、二条妙覚寺御寄宿。迎も細々御参洛の条、信長公御座所これなく候ては如何の由にて、上京むしやの小路にあき地の坊跡これあるを御居住に相構へらるべきの旨上聞に達せられ候の処、尤も然るべきの由

仰せ出ださる。即ち公儀より御普請仰せつけらるべきの旨の御斟酌数ヶ度に及ばれ候といへども、頻りに上意の事候間、御錠に応へらる。尾・濃・江三国の御伴衆は御普請御赦免なられ仕らず候。畿内の面々など洛にて候

三月廿四日、御鞦始め有り、先方に築地をつかせられ、請取りの手前貼に舞台をかざり、児若衆色々美々敷出立にて、笛・太鼓・つゝみを以て拍子を合せ囃し立て、各も輿に乗ぜらる。いとどさへ、都は人の群衆と申し候へば、御普請の上下、見物の貴賤、花を手折り、袖を連ね、衣香当を撥い、四方に薫し、様々諸の仕立てあり。天下の納面白く候なり。御普請奉行、村井民部・島田所助。御大工棟梁、池上五郎右衛門に仰せつけられ候ひき。細川六郎殿岩成主税頭始めて、今度、信長公へ御礼仰せられ、御在洛候なり。今般大坂門跡より万里江山の一軸、并、白天目、信長公へ進上なり。

交野へ松永取出仕り候て、追払はるゝの事

去る程に、三好左京大夫殿、非儀をおぼしめしたて、松永弾正・息右衛門佐、父子と仰せ談ぜられ畠山殿に対し既に鉾楯に及ばれ候。安見新七郎が居城交野へ差し向ひ、松永弾正・取手を申しつけ候。其の時の大将として山口六郎四郎、奥田三川、両人勢衆三百ばかり取出に在城なり。

信長公より、討ち果すべきの旨にて遣はされし御人数。佐久間右衛門、柴田修

理亮、森三左衛門、坂井右近、蜂屋兵庫、斎藤新五、稲葉伊予、氏家左京亮、伊賀伊賀守、不破河内、丸毛兵庫、多賀新左衛門、此の外、五畿内・公方衆を相加へ後詰として御人数出だされ、取出を取り巻き、志々垣結ひまはしおかれ候処に、風雨の紛に切り抜け候なり。三好左京大夫殿は若江に楯籠り、松永弾正は大和の内信貴の城に在城なり。息右衛門佐は奈良の多門に居城なり。

五月十九日、信長天下の儀、仰せつけられ、濃州岐阜に至りて御下。

奇妙様御具足初めに、虎後前山御要害の事

七月十九日、信長公の嫡男奇妙公御具足初に信長御同心なされ、御父子江北表に至りて御馬を出だされ、其の日、赤坂に御陣取り、次の日、横山に御陣を居えられ、廿一日、浅井居城大谷へ推し詰め、ひばり山、虎後前山へ御人数上せられ、佐久間右衛門、柴田修理、木下藤吉郎、丹羽五郎左衛門、蜂屋兵庫頭に仰せつけられ、町を破らせられ、一支もさへず推し入り、水の手まで追ひ上げ、数十人討捕る。柴田修理、稲葉伊予、氏家左京助、伊賀伊賀守、是れ等を先手に陣とらせ、次の日、阿閉淡路守楯籠もる居城山本山へ、木下藤吉郎差し遣はされ、麓を放火候。然る間、城中の足軽ども百騎ばかり罷り出で、相支へ候。藤吉郎見計らひ、焔と切りかゝり切り崩し、頸数五十余討ち捕る。信長公御褒美斜ならず。

七月廿三日、御人数をし出だし、越前境、与語・木本、地藏坊中を初めとして、

堂塔伽藍・名所旧跡、一字も残さず焼き払ふ。

七月廿四日、草野の谷、是れ又、放火侯。并に、大吉寺と申して、高山能き構へ、五十坊の所に侯。近里近郷の百姓など当山へ取り上り候。前は嶮難のぼり難きに依つて、麓を襲はせ、夜中より、木下藤吉郎・丹羽五郎左衛門、うしろ山続きに攻め上げ、一揆僧俗数多切り捨てられ、海上は打下の林与次左衛門・明智十兵衛、堅田の猪飼野甚介・山岡玉林・馬場孫二郎・居初又二郎に仰せつけられ、困舟を拵へ、海津浦、塩津浦、与語の入海、江北の敵地、焼き払ふ。

竹生島へ舟を寄せ、火屋・大筒・鉄炮を以て攻められ候。此の中、江北に聞かざる一揆と云ふ事を企て、伴個の奴原、風に木葉の散る様に、ちり失せ候て、今は一人もこれなく、猛勢とり詰め、悉く田畠を苅田に申しつげられ候間、浅井人数は次第貼に手薄に罷りなるなり。

七月廿七日より、虎後前山御取出の御要害仰せつけらる。然れほ、浅井方より越前の朝倉かたへ注進の申し様、尾州、河内長島より、一揆蜂起候て、尾・濃の通路をとめ、既に難儀に及ばせ候間、此の節、朝倉馬を出だされ候へば、尾・濃の人数悉く討ち果たすの由、偽り申し遣はし候。注進、実に心得、朝倉左京大夫義景、人数壹万五千計にて、

七月廿九日、浅井居城大谷へ参着侯。然りと雖も、此表の為体見及び、抱へがたく存知、高山大づくへ取り上り、居陣なり。然るところを足軽どもに責むべきを仰せつけられ、則ち、若武者ども野に臥せ、山に忍び入り、のぼり・さし物道

具を取り、頸二ツ三ツ宛て取り参らざる日もこれなし。高名の軽重に随ひ、其の御褒美を加えらるゝの間、弥嗜み大方ならず。

八月八日、越前の前波九郎兵衛父子三人、此の御陣へ参ぜられ候。信長公の御祝着斜ならず。則ち、御帷・御小袖・御馬・皆具ともに拝領申され候。翌日又、富田弥六・戸田与次・毛屋猪介、参られ候。是れ又、色々下され、忝き次第、大方ならず。虎後前山御取出御普請程なく出来訖んぬ。御巧を以て、当山の景氣、興ある仕立、生便敷御要害見聞に及ばざるの由にて、各耳目を驚かされ候。御座敷より北を御覽せられ候へば、浅井・朝倉、高山大づくへ取り上り、入城し、難堪の峠に及ぶ。西は海上漫々として、向かひは比叡山八王寺、昔は尊き靈地なりといへども、一年、山門の衆徒など逆心を企て、自業自果の道理を以て、山上山下灰燼となさんと、是に御憤を散ぜられ、御存分に仰せつけられたる所なり。又、南は志賀・唐崎・石山寺、彼の本尊と申すは大国震旦までも隠れなき靈験殊勝の觀世音。往昔、紫式部も所願を叶へ、古今翫所の源氏の巻を注しをかれたる所なり。東は高山伊吹山、麓はあれて残りし不破の関、何れも眼前に及ぶところの景氣。又、丈夫なる御普請、申し尽しがたき次第なり。虎ごぜ山より横山までの間三里なり。程遠く候間、其の繋ぎとして八相山・宮部郷両所に御要害仰せつけらる。宮部村には宮部善祥坊を入れをかせられ、八相山には御番手の人数仰せつけらる。虎後前山より宮部まで路次の一段あしく候。武者の出入りのため、道のひろき三間、間中に高々とつかせられ、其のへりに敵の方に高さ一丈に五十町の間、

築地をつかせ、水を関に入れ、往還たやすき様に仰せつけらるる事も、おびただしき御要害、申すも愚かに候。朝倉此の表に候ても、苦しからず候間、横山に至つて、信長公御馬を納めらるべきの旨に候。其の一兩日以前に、朝倉方へ使者を立てさせられ、迎も是れまで出張の事に候間、日限をさし、一戦をもつて果てられ候へと、堀久太郎を以て仰せ遣はされ候と雖も、中々返答に及ばざるの間、虎後前山には、羽柴藤吉郎と定番として、入れおかる。

九月十六日、信長公嫡男奇妙公御父子、横山に至りて御馬を納められ候へき。

霜月三日、浅井・朝倉人数を出だし、虎後前山より宮部までつかせられ候築地、引き崩すべき行として、浅井七郎、足輕大将にて、先を仕り、懸り来たる。則ち、羽柴藤吉郎人数を出だし、取り合う。梶原勝兵衛、毛屋猪介、富田弥六、中野又兵衛、滝川彦右衛門、先懸にて、暫し支へ合ひ、追い崩し、各功名比類なし。滝川彦右衛門事、日比御近習に召し使はれし者にて候。以前大谷表にて大さし物を仕り、罷り出で、させる働きもこれなく、曲事と仰せ出ださる。此の頃、御勘当を蒙り、虎後前山に居残り、今度、目に見へ候働きを仕り、各御取り合ひにて、御前へ召し出だされ、面目を播すなり。

味方が原合戦の事

是れは遠州表の事。霜月下旬、武田信玄、遠州二股の城取巻くの由、注進これ

あり。則ち、信長公御家老の衆、佐久間右衛門、平手甚左衛門、水野下野守大将として、御人数遠州浜松に至り参陣のところに、早、二股の城攻め落し、其の競ひに、武田信玄堀江の城へ打ち廻り、相働き候。家康も浜松の城より御人数出だされ、身方ヶ原にて足軽ども取合ひ、佐久間・平手を初めとして、懸けつき、互に人数立ち合ひ、既に一戦に取り向かふ。武田信玄、水股の者と名付けて、三百人ばかり、真先にたて、彼等にはつぶてをうたせて、推し大鼓を打ちて、人数かゝり来たる。一番合戦に、平手甚左衛門、同家臣の者、家康公の御内衆、成瀬藤蔵。

十二月廿二日、身方ヶ原にて数輩討死これあり。さる程に、信長公、幼稚より召し使はれ候御小姓衆、長谷川橋介・佐脇藤八・山口飛騨・加藤弥三郎四人、信長公の御勘当を蒙り、家康公を憑み奉り、遠州に身を隠し、居住候らひし。是れ又、一番合戦に一手にかゝり合ひ、手前にて比類なき討死なり。爰に希代の事ある様子は、尾州清洲の町人、具足屋玉越三十郎とて、年の頃廿四、五の者あり。四人衆見舞ひとして、遠州浜松へ参られ候折節、武田信玄、堀江の城取り詰め、在陣の時に候。定めて、此の表相働くべく候。さ候はば一戦に及ぶべく候間、早々罷り帰り候へと、四人衆達つて異見候へば、是れまで罷り参り候のところを、はづして罷り帰り候はば、以来、口はきかれまじく候間、四人衆討死ならば、同心すべきと申し切り、罷り帰らず、四人衆と一所に切つてまはり、枕を並べて討死なり。家康公中筋切り立てられ、軍の中に乱れ入り、左へつきて、身方が原のきし道の一騎打ちを退かせられ候を、御敵、先に待ち請け、支へ候。馬上より御弓

にて射倒し、懸け抜け、御通り候。是れのみならず、弓の御手柄今に始まらず、
浜松の城堅固に御拘へなさる。信玄は勝利を得、人数打ち入れ候なり。